

シンポジウム：子どもの心を育む環境とは

心の扉、学校教育の立場から考える

人間総合科学科目教授 佐藤 正昭

近年、子どもたちの問題行動が多発し、しかも私たちの考えを超えるような事件が発生して、教育関係者はもとより多くの人々に深刻な影響を与えています。新聞等のメディアは、最近の子どもたちがどうなっているのか、子どもたちの心に何か変化が出てきているのかなどのことで、識者や教育評論家たちの様々な考えを載せています。

現代の社会において、子どもの教育や心を育てることを担う場は、第一義的には家庭であり、学校でありそして地域社会の大人たちであることは論を待たないでしょう。私は、長い間教育現場（高等学校）と教育行政において仕事をしてきたことから、このことについて学校教育の立場からその現状と考えの一端を述べてみることにしたい。

学校においては、「生徒指導」ということで子どもたちの指導がなされています。この指導は、児童・生徒の発達段階に即して、すべての子どもたちがより良い人格形成を求めているという基本認識に立つものであります。そのような子どもたちを側面から援助、支援する機能が生徒指導であるわけです。この生徒指導の機能が発揮される対象は、すべての子どもたちであり、発揮する主体はすべての教師であり、発揮される場はすべての教育活動にあるわけであります。

このような生徒指導が効果的になされるためには、学校においては①子どもの内面理解を大切にする ②先生たちの協同指導体制を大切にする ③家庭や地域社会との連携を大切にする ということを中心に進めています。

子どもの内面理解といっても容易ではありません。よく問題行動が発生すると、「ごく普通の子、日ごろ変わったことはみられなかった。」などというコメントがありますが、果たしてどうであったのか、子どものだすシグナルを見過ごすことはなかったのかということを考えさせられます。内面理解を深めるためには、教師が子どもと向き合う時間を豊かにし、日常的に信頼関係をつくっておくことが肝要であります。「子どもの心の扉の取っ手は子どもの内にしかない。」ということが言われますが、信頼関係の中で子どもが徐々に心を開くことになるものであると考えます。

先生方の協同指導体制ですが、先生方も考え方、指導観、価値観などは多様であります。しかし、学校として

指導の方針を決めたら、先生方一人一人の個性や持ち味の中で子どもたちの良さやつまずき、悩みなどを受け止める取り組みを進めなければなりません。

家庭や地域社会との連携についてですが、家庭や地域社会の教育力の低下がそれを妨げているということが言われます。それだけにこの3者の連携は大切であります。しかし、何もないところからは連携の機運は生まれるものではありません。まず学校が教育活動を充実させることに努力し、そのことにより生徒や学校が変化すれば家庭や地域社会が学校に目を向けることとなります。そのためには、学校と家庭、地域社会の間で児童・生徒の心を育てることを軸とした情報のボール投げを日常的に行うことが大切であります。

最後に、子どもたちの指導に当たる教師について述べなければなりません。私は今日ほど教師の在り方が問われている時はないと思います。教師は子どもの心を揺さぶる直接の場にいます。常に子どもたちの心に添う教師、自らの在り方を問い続ける教師、人生を語るができる教師など、その中のひとつでも大切にできる教師を求めて努力して欲しいものと考えます。

シンポジウム：子どもの心を育む環境とは

モダニズム、ポストモダニズム、そして生きる力

社会福祉学科教授 入江 良平

「子供の心を育む環境」というテーマの背景には、現代における危機意識が反映されている。日本は、戦後の高度成長を経て物質的な豊かさを達成した。しかし、経済的發展はそのまま人々の幸福をもたらすものではなく、むしろさまざまな社会病理が広がっており、とりわけ子供たちの間で、奇妙で不安な現象や事件が次々に起こっている。このような状況を改善したいという願いの具体的な表現として、「よりよい環境を整えたい。そのためには何をすればよいのか」という問いが提出されるのであろう。

だが、問題を現実的に考えようとするならば、こうした問いそのものに対する反省が必要なのではないか。

その姿勢はモダニズム（近代思想）にもとづいている。モダニズムは世界が合理的秩序にしたがって解明されることを考え、その知識にもとづいて世界を「あるべき姿」へと作りかえる力が人間にあると信じて、この二世紀以上にわたってユートピア建設の努力を続けてきた。しかし、人類の知識と技術が近代において未曾有の発展を実現した現代にいたって、その限界もまた明らかになりつつあ